



伊藤元重の

エコノオッチ

早期回復、「戦後の経済運営」カギ

現在の状況を1930年代の世界大恐慌と比べる議論をよく見かける。

今年の世界の経済成長率が、大恐慌以来の低水準になるとしたIMFの予想のインパクトは大きかった。もちろん、金融危機から生じた世界大恐慌と、今回の世界危機では違った点も多い。大恐慌の研究でも知られるバーナンキ元米連邦準備理事会議長は、今回の危機は大恐慌というよりは吹雪みたいなものと発言している。吹雪のような経済外的な要因で、経済が全面的にストップする事態に似ているというのだ。ただ、吹雪に例えるのは正しくない面もある。吹雪は数日で止むもの

世界大恐慌との比較

だ。そして吹雪が止まれば、よつな厳しい措置をとって、「吹雪」の期間を短くすることが重要となる。

しかし、今回のウィルスは何カ月も、あるいは1年以上にわたって猛威を振るう可能性がある。長期間経済活動が止まれば、回復は容易ではない。

経済が止まっている間に多くの企業が倒産すれば、その企業が支えてきた技術やノウハウ、雇用の破綻される。長期間にわたって失業する人が増えれば、その人が再就職することがより困難になる。

要するに、経済的低速化が長引けば、それだけ回復のスピードが遅くなる。だからこそ、できるだけ感染が早く収束する

よつな厳しい措置をとって、「吹雪」の期間を短くすることが重要となる。

その上で、今回の危機は、回復は容易ではない。経済が止まっている間に多くの企業が倒産すれば、その企業が支えてきた技術やノウハウ、雇用の破綻される。長期間にわたって失業する人が増えれば、その人が再就職することがより困難になる。

要するに、経済的低速化が長引けば、それだけ回復のスピードが遅くなる。だからこそ、できるだけ感染が早く収束する

よる経済の不調は、きっかけこそウィルスという経済外的な要因であるが、不況が長引くのか、それが早期の回復を実現できるのかの鍵を握っているのは、ウィルス後の経済政策運営である。

1929年のウォール街の株の暴落で始まった世界大恐慌は40年前後まで10年以上も続いた。株の暴落はきっかけかもしれないが、それから10年が破綻される。長期間にわたって不況を長引かわたって失業する人が増えれば、その人が再就職することがより困難になる。

かけこそウィルスという経済外的な要因であるが、不況が長引くのか、それが早期の回復を実現できるのかの鍵を握っているのは、ウィルス後の経済政策運営である。

残念ながら、すでにウィルス後の動きとして懸念すべきいくつかの兆候が出てきている。

一つは石油の動きだ。4月20日に石油の先物価格がマイナスになったのは、史上初の出来事だった。石油需要が世界的に大きく落ち込んだことが原因だ。石油市場でどのような動きが起きるのかわからないが、世界の政治経済に大きな影響をもたらすリスクを抱える。

一つは石油の動きだ。4月20日に石油の先物価格がマイナスになったのは、史上初の出来事だった。石油需要が世界的に大きく落ち込んだことが原因だ。石油市場でどのような動きが起きるのかわからないが、世界の政治経済に大きな影響をもたらすリスクを抱える。

金融市場の今後の動き

も気になる。これまでの市場の動揺はウィルス感染の急激な広がりに対する市場の反応であった。これまでのところ、中央銀行の大胆な介入によってなんとか安定感を保っている。しかし、世界経済の低迷が広がれば、金融市場に新たな圧力をかけることになる。

当面はウィルスとの競争で、「戦時の経済運営」に重点がある。ただ、経済政策運営の巧拙が試されるのは「戦後の経済運営」だ。ウィルス感染の原因だ。石油市場でどのような動きが起きるのかわからないが、世界の政治経済に大きな影響をもたらすリスクを抱える。

（学習院大学国際社会科 学部教授）

（学習院大学国際社会科 学部教授）

（学習院大学国際社会科 学部教授）

*この記事・写真は日本経済新聞社の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。